

小児歯科の重要性と実状

菊池進



現在、日本の経済・工業・教育・医学などのあらゆる方面の高度な発展に比べ、小児の歯に関する一般的知識は実に低調である。また乳歯の重要性についても、ごく一部分しか知られていないのは誠に寒心の至りである。

小児の歯に関しての一般的な常識としては「ムシ歯の予防に歯を磨く」、「甘いものを食べるとムシ歯ができる」、「乳歯は抜けたかわる」、「フッソを塗ればムシ歯の予防ができる」といった程度の域を出ないものと思う。

しかし小児の歯科分野における問題はそれほど簡単なものではないのである。乳歯は噛むということ以外に大きな使命もある。

小児という変わりやすい年代の顔・顎・口などの変化は、人間一生の最も激しい時代で、ときには相当違った個性をもった個体になってしまうこともある。その時代に、乳歯が永久歯

と交換し、異なった素材からできた、別の歯列が作られるのである。これは歯列のみに起こる現象なのである。

小児歯科の対象は、新生児から永久歯が完成するまでの小児で、多彩な変化に富む年齢層を持っているので、各々個体のその時点での歯列のあり方を把握して、診療に従事しなくてはならない。成人のように完成された個体でないので、各年代画一的な治療が行なえないのである。さらに小児は、各年代によって心理的にもきわめて変化があり、人格形成の最も大切なときであるということは、誰しも知っていることである。

このように心身の形成期に身体的、精神的な欠陥を持つことは、将来に、なんらかの影響を持ち込むことになる。歯科の領域はたしかに、ずいぶん小さい分野であるし、口腔内の閉鎖された部分でもあるから、恐らくどれほどの影響が、と思われるのも当然である。しかし人間の表看板ともいべき顔の大半を

占め、表情のほとんどを左右し、一日も休むことなく咀嚼しなければならぬこの口は、顔の美醜がときに人生を変え、性格を変えることを思うとき、小児だという理由で軽視できないものがある。集団生活においては、小児は決して無感動なものではなく、むしろ相当デリケートな感情を持っているのをとかく忘れがちであり、「小児のくせに」ということで片づけられてしまっていることが多いのである。

赤ちゃんの歯が生え始めたとき、全く可愛いもので、毎日の歯の生えるのを待つ心ほどの親も同じである。この乳歯は、そのときできて生えてきたのでなく、すでに母体内で前歯の大半は作られているのである。「蟬の幼虫が長い地中の生活から、やっと地上に出てきたように」

母親依存から独立して、自分の歯で、噛み、自分の体を作るためである。そして親のフトコロの中に入るような小さい体が、親より大きな子どもに成長発育するまでの体を作る食物を、毎日彼らの歯で咀嚼するのである。

その大切な時期に、病んだ歯や、歯が失われた場合健康を阻害していることはたしかである。また病んだ歯を持っていることは、ときには歯のない場合よりむしろ悪いことが多い。たとえば偏食についても、先天的な食物の嗜好によるより、食物の種類によつての許否である場合がかなり多い。孔のあいた歯では、肉類などは食べられるものでない。小児はそれを経験的に

「肉↓痛み↓きらい」といった、観念的なものとなり、それが固定して偏食となることが多い。さらに乳歯はその下に幼い永久歯の芽を抱いているので、乳歯の根に及ぶ病気の場合、それは直接幼い永久歯の芽に影響を与え、しばしば醜いアバタのような永久歯が生えてくることがある。また乳歯の根は、永久歯の生えてくるに従って、吸収されるもので、歯髄(神経)の腐ったような場合の治療はきわめて困難なのである。

乳歯のムシ歯は、とにかく早期に治療しなくてはならないのである。「乳歯は抜けかわるからほっておけばよい」、などというのは全く無責任なことである。腐った乳歯の根は自然に吸収されない。それは人が腐ったものを食べないのと同じで、ときには永久歯が不正な位置に避けて出てくることがある。これが永久歯の咬合を乱す原因となっているのを日常よく見ることである。

乳歯の使命で、噛むことの他にもう一つの大きな役目は、永久歯のための余地を確保しておくことである。このことはあまり一般に知られていないと思う。乳歯が欠損したり、失われてしまった場合、多くの不正咬合が作られるということ、私は、私が多く不正咬合の患者に、明らかに乳歯の早期欠損が関係していると思われるものが多いことを感じたことである。

かつて、少しオーバーかも知れないが、「もし乳歯を完全に監視し、その交換をよく調整したならば、現在の不正咬合の半数

は予防できるだろう」とまでいったことがある。これは歯の痛みという、はっきりしたものがなく、乳歯欠損の重要性を痛切に感じさせないのと、それらの悪い結果が何年後にくるかも知れないという未来の予想だからだと思う。永久歯が生えてくる何年後の結果を見て、初めておどろき、矯正治療に通うという結果になる。

小児の治療の場合、歯科各科の総合的な知識と経験によつて、小児の変わりやすい未来に富んだ時代の欠陥を先まで予知し、現在の障害を治していかななくてはならないのである。だから完成された成人の場合より一層困難を伴うのである。そのため、われわれは必ず定期的に診査しその変わり方を把握していく必要がある。

小児歯科で特にむずかしいのは小児の取り扱い方で、治療の成功、不成功はいかに小児をうまく扱うかにかかっている。このことが成人の治療と大きく異なるところでもある。

われわれは常に小児の年齢、性格、家庭環境など多くの条件を加味し、小児の行動型に合った取り扱い方をするので、ただ小児の機嫌取りによって治療するのは完全な治療は成功しないのである。成人でも治療そのものはあまり楽しいことではないし、苦痛はつきものである。まして小児では、その訴えは、「ワメク」こと、「ナクコト」で表現するのであるから、泣くだけで治療を断念したり、そのときのまぎらわしの薬を塗る位で終

わらしてしまったりすることは、むしろ小児に治療の重要性を知らせないのみでなく、長い間治療に通院しても、口の中にはなんらの処置が残されていなかったり、その間にも他の歯がどんどんと悪くなってしまっているのをよく見るのである。

私も外国に住んで、日本の母親がいかに子どもを甘やかし、子どもも母親に依存して独立心を失っているのは大変なものであるのを感じた。そのことがときに子どもを不幸にしているのに気づかないことが多いのではないかと思う。子どもが治療で泣くと、母親がかわいそうといって、治療を止めさせたいと思っているのがよくわかる。これはムシ歯がひどくなって、抜いたり、手術したりしなくてはならない方が、よりかわいそうなる結果になってしまうことにも気づいていない方が相当ある。

われわれは一時的には、治療が恐くとも、子どもに治療の必要さと、その治療のきびしさを十分教育するのが、われわれの仕事の一部でもあると思う。よく母親の態度がわれわれの治療に大きな障害となることがある。たとえば「今日は痛いことはしないから」、「泣くと先生に注射されますよ」、「今日は見るだけですよ」、という。しかしわれわれの治療計画では、痛いこと、注射、歯を削ることをしなくてはならない。そうなること小児には歯科医や母親に対する不信を生じてしまう。こういう母親の態度が小児歯科の治療を一層困難なものにしてしまうことはたしかである。

現在日本の小児歯科は、臨床の歴史も浅く、まだ一般化して
いない。しかし各大学ではその専門の科があり、小児の治療に
専念しているのである。乳歯の苦痛に悩まされている小児がい
かに多いことか、ほとんどの大学の小児歯科は満員であること
でもわかる。「乳歯は抜けかわる」、「子どもがかわいそうだ」、
「子どもがいやがる」、という理由で手おくれになっている例
が全く多い。

また開業医に行ってもよく診てもらえない、というのもある
と思う。たしかに開業医のほとんどは小児歯科の特別な教育を
受けていないこともたしかであるが、しかし、現行の健康保険
制度では、一個の歯の治療としてしか支払われない。抜き歯な
ども、子ども半額的なところもある。それは「乳歯」の治療で、
「小児」の治療という特殊性を考慮されていないのと、「完全
な小児歯科の治療」を理解されていないことからきたもので、
このままでは将来は、暗いものと私は思う。

混んでいる待合室でいたずらする子ども、口を開かない子ど
もは開業医にとつては、むしろ他の患者の邪魔者的存在になっ
ているのが現状である。これは開業医に相当の犠牲的な心があ
ったとしても、麻酔注射に取りかかると、どれほどの時間と
人手が必要であるかを思うと、開業医をせめるわけにもいかな
い。

しかし小児歯科に対する一般開業医の関心はたいへん大きい

ことは事実で、小児歯科の専門学会も数年来すばらしい発展を
とげ、会員も相当な数にのぼり、学会ごとに、盛大となつてき
ているのを見ても十分熱意を感じているのである。

しかし直接患者の大多数に接触する多くの臨床家が、進んで
小児の歯科治療に専門的知識と技術を持って治療に当たれるよ
な、法的制度が一日も早くできることを痛切にのぞんでいる。

特に最近、私たちの病院を訪れる、精神薄弱児などの特殊児
は、ほとんど無視されている気の毒な存在である。こういつた
子を持つ親は、何軒もの歯科医を回って歩いていて、全く絶望
的な気持になっている。事実こういう小児の治療は想像以上た
いへんなもので、種々の設備や助手、術者の熱意がなければで
きないことである。

それに対しては、現在の「健康保険」では、成人の治療と同
一価格であるということも、社会的な問題となると思う。臨床
家が行なうにはあまりにも犠牲が多過ぎるので、敬遠されてし
まうのもやむを得ないこととも思われる。現在われわれもこう
いう子どものために、少しでも、普通児と同じ幸福を与えたい
と真剣に研究しているのである。

小児の歯の治療が行なわれている程度は、その国の文化のバ
ロメーターでもあると思う。美しい服を着ていても口の中がム
シ歯だらけでは、文化の底の浅さを物語っているのではあるま
いか。

(日本歯科大学)